

人類生態学はフィールド調査をどう記録するか

○梅崎 昌裕
東京大学大学院医学系研究科

〔人類の自然誌〕

最初に人類の自然誌をごく簡単におさらいしておきたい。アフリカで進化した私たち新人は、おそらく 10 万年より少し前にアフリカを出て、現在までに地球上のほぼ全ての地域に拡散した。新人は、アフリカとは異なる環境でも実施可能な生業をみつけだし、それに関連した社会の仕組みをつくりだした。現在、地球上にクラス新人は、さまざまな生物学的な特徴をもち、いわゆる「文化」も多様である。

新人は、その誕生より狩猟採集によって食べ物を獲得していた。狩猟採集は、生態系のなかで生産される植物および動物を利用する生業であり、他の動物とは食物連鎖によって結ばれていた。端的に言えば、新人の数が増えすぎると、食べ物が不足し、結果的に新人の数は抑制されていたであろう。新人の数は、生態系の人口支持力によって規定されていた。

およそ 1 万年まえに、新人は農耕（あるいは栽培植物と家畜）を発明した。そのことによって、本来の生態系の構造を改変し、自分にとって有用な植物や動物を育て、自らの力で人口支持力を増加させることができるようになった。農耕の起源地で栽培された作物は、もともとはそれぞれの地域における野生種であり、たとえば、東南アジアでは根菜類・バナナ、地中海地方ではエンドウ、コムギ、オオムギなどが栽培化された。それらの栽培植物は、それぞれの地域の食文化を形成することになる。

新人は都市をつくり、そこでは職業分化がすすんだ。そして、18 世紀になると「産業革命」がおり、太陽エネルギー以外のエネルギー源（主に化石燃料によるもの）を活用した近代科学技術が新人の生存に大きな意味をもつようになった。より多くの人が都市に暮らすようになり、人口は増加した。

地球上に暮らしていた新人のなかには、早くから産業革命の恩恵を受けたグループがいた一方で、そのタイミングが遅かったグループ、さらには最近まで産業革命の影響をほとんど受けなかったグループもいた。結果的に、過去数百年の間に、地球上の地域間の人口・経済格差はかつてないほど拡大した。

1950 年代以降、グローバリゼーションの進展により、「もつ国」から「もたない国」への経済資源あるいは技術の移転がはじまった。この国際援助においては、対象とする国における生存システムの全体的な変化を視野に入れるというよりも、援助をする側のコンテクトに依存したパーツごとの援助がなされたために、時として、援助者が意図しない結末を招くこともあった。たとえば、おおくの集団では現代医療技術の導入によって子どもの死亡率は大きく減少したが、その結果、集団の人口はかつてないスピードで増加した。

一方、産業革命の恩恵を早くから享受したほとんどの国々（現在のほとんど

の先進国がこれに該当する)では、少子高齢化がすすんでいる。出生力は置き換え水準を大きく下回り、人口に占める被扶養者の割合は増加している。人口は減少すると予想されており、これだけ大規模で継続的な人口減少は、新人が始めて経験することである。

[調査の方法]

人類生態学においては、いかなる健康の問題を扱う場合でも、それを人類の自然誌のなかに位置づけながら研究がすすめられる。たとえば、現代の日本における少子高齢化の問題は、産業革命にともなう現代科学の成立によって疾病のコントロールが可能になったこと、再生産期間を終えてからも生存する人類のライフヒストリーのありかた、ジェンダーの関係性にかかわる社会のとらえ方が変化してきたことなどを踏まえることが重要であろう。個人的には、人類生態学の学問的固有性は、「そのときの自然環境・社会環境にくわえて、情報や技術の流入、発明や災害などの大きなできごと、新しい考え方や社会のはたらきかけなど、集団が経験してきたさまざまな事柄の影響をふまえつつ、人間の健康を理解する」姿勢にあると考えている。

この目標を達成するためには、どのような調査を実施し、それをどのように記録すればよいだろうか。人類生態学において、基本的な調査項目と考えられてきたのは、食物摂取パターン、行動パターン、そして人口の再生産パターンの3つである。パプアニューギニアなど、集団の人口規模が小さく、自然の優先する社会における調査では、これらの調査項目の必然性がわかりやすい。人々がどうやって食物を生産・獲得し、どのような食物をどのくらい摂取し、そしてどのように生まれ死んでいくのか、それぞれが集団の健康の直接的な決定要因になっているのは自明であろう。一方、現代日本のような、制度や経済の優先する社会においても、どのような仕事をして、どこで食物を入手し、どのようなものを食べ、どのようにして生まれ死んでいくのか、これらの項目が人間の生存・健康の基本になっているのは間違いない。

基本的な調査項目については、集団間あるいは経時的な比較を可能とするために、定量的なデータを収集するのが普通である。たとえば、食物摂取パターンの調査では、直接秤量法、24時間思い出し法など栄養学の分野で確立されてきた方法を用いてエネルギーと栄養素の摂取量が計算される。行動の調査では、人類学で確立した生活時間調査の方法が採用されることもある。近年では心拍計や加速度計による身体活動量の評価、GPSを活用した空間利用パターンの評価なども一般化した。人類生態学の調査における方法は、デフォルトで存在しているものではなく、それぞれの研究テーマに応じてさまざまな学問分野で成立したものを採用し、必要に応じて改変するものである。

[フィールドワークの意義]

人類生態学調査では、伝統的に、調査者がフィールドにおいて自らデータを収集することが重要視されてきた。その理由は、ひとつには現実的なものであ

る。一般的に食生活や行動の調査など、人々の起床から就寝までの直接観察が必要な調査では、調査者以外には正確なデータを収集するモチベーションが期待できない。さらに、フィールドの人々との日常的なやりとりのなかでの「気づき」、データを収集する際におこるさまざまなハプニング、そして調査がうまくいかない経験ですら、新しい研究のシナリオをおもいついたり、収集したデータを適切に解釈するための財産になるものである。

国際保健学では一般的な「よく訓練された調査者」を動員した質問紙調査ではなく、調査者自身によるデータ収集が志向される背景には、人間の「報告」にかかわる恣意性という人文科学で議論されてきた本源的な問題に加えて、その方法では短期間におおくのサンプル数のデータ収集が可能なことのトレードオフとして、調査者がフィールドで学ぶ機会を自ら放棄してしまうことになるという思いもある。

近年では、科学技術の進展により、かならずしも現場にいかなくとも収集可能なデータもおおい。リモートセンシングの技術を用いた土地利用の評価、地球規模で整備が進められているデジタル標高データをもちいた地形評価、携帯電話が収集する位置情報を活用した行動評価などは、人類生態学者のフィールド調査にも活用された実績がある。また、国勢調査や DHS (Demographic Health Survey) など、あらかじめ定められた研究デザインによって収集された二次データは、対象とする地域の人類集団の全体的な理解に貢献するものである。

[記録の方法]

調査の記録の方法は、個人によってさまざまであろう。私自身が心がけていることは、食事調査、人口学調査、行動調査など、調査ごとに準備するノートとは別に、日々の気づきや発見を記録する「戦略ノート」を準備することである。パプアニューギニアで調査をしていたときの「戦略ノート」には大学ノートを使用した。記録は日付順にして、ノートの見開きの左側には気づきや発見にかかわる事実関係（具体的にみたこときいたこと、できごとの経過など）を書き、右側には自分の考えたこと、次の日に確認したいこと、今後の調査戦略などを書くようにした。中国の海南島で調査をしたときは、お酒の席で話すことにおもしろいことが多かったので、どこでも持ち歩ける小型のフィールドノートを使用した。これらの「戦略ノート」は、個別の定量調査の成果をつなぎあわせる司令塔のような役割を果たすものである。そういう意味で、人類生態学のフィールド調査の記録としては最も重要なものともいえよう。

[参考文献]

渡辺知保, 梅崎昌裕, 中澤港, 大塚柳太郎, 関山牧子, 吉永淳, 門司和彦 (2011) 「人間の生態学」. 朝倉書店.
大塚柳太郎, 河辺俊雄, 高坂宏一, 渡辺知保, 阿部卓 (2002) 「人類生態学」. 東京大学出版会.